

2016年12月8日

報道発表

バードライフ・インターナショナルは IUCN レッドリスト 2016 鳥類部門を 改訂しました

バードライフ・インターナショナルは、英国ケンブリッジに本部を置く国際環境 NGO で、IUCN レッドリスト鳥類部門の公式な策定機関として、鳥類部門のリストを改訂しています。今回の鳥類部門改訂では、分類が見直されたことにより 742 種が追加され、合計で 11,121 種の鳥類についての情報が掲載されています。このうち、新たに追加された 84 種を含め、合計で 1,460 種が絶滅危惧種に指定され、その割合は鳥類全体の約 13%に達しています (表 1)。

表 1 レッドリスト鳥類部門 2015 と 2016 の比較

| | 2015 年版 | 2016 年版 | 新規追加 |
|----------------------|-------------------|-------------------|-----------------|
| 鳥類の種数 | 10,424 | 11,121 | 742 |
| 絶滅 (EX) | 140 | 156 | 13 |
| 野生絶滅 (EW) | 5 | 5 | 0 |
| 絶滅危惧 IA 類 (CR) | 218 | 225 | 13 |
| 絶滅危惧 IB 類 (EN) | 416 | 449 | 28 |
| 絶滅危惧 II 類 (VU) | 741 | 786 | 43 |
| 準絶滅危惧 (NT) | 971 | 1,029 | 63 |
| 情報不足 (DD) | 61 | 66 | 5 |
| 軽度懸念 (LC) | 7,872 | 8,405 | 577 |
| 絶滅・野生絶滅以外の合計 | 10,279 | 10,960 | 729 |
| 絶滅危惧種 (CR/EN/VU) の割合 | 1375 (全体の 13%) | 1460 (全体の 13%) | 84 (全体の 12%) |

今回、新たに絶滅危惧種に指定された種のうち、日本に生息するホオジロの仲間のカシラダカは、この 30 年で 75–87%もの個体数が減少したことが報告され、軽度懸念 (LC) から絶滅危惧 II 類 (VU) へと大幅に絶滅の危険度がランクアップされました。

また、アジア地域では、インドネシアを中心に生息する鳥類 19 種の絶滅危惧のランクが上がりました。商取引を目的とした鳥類の「持続可能でない捕獲」が主な原因となり、今回のランクアップにつながったことが、様々な研究結果から明らかにされました。

アフリカでも状況は芳しくなく、ペットとして人気の高いヨウムが絶滅危惧 II 類から IB 類に変更されました。バードライフ・インターナショナルが主導した調査では、個体数が 99%も減少していた地域がありました。

一方で、明るいニュースもありました。大西洋やインド洋などの離島にのみ生息する、世界でもとくに希少で脆弱な種であるアズレスウソ、セントヘレナチドリ、セーシェルメジロなどは、今回のレッドリストで絶滅危惧ランクが下げられました。各地で実施されてきた熱心な保全活動により、個体数が回復したのです。

レッドリストは、野生生物の多様性と環境変化を示す1つの指標となります。最新の研究データに基づき、継続的に改訂を実施することで、今後の保全活動の進展に大きく寄与することが期待されます。

【本件に関するお問い合わせ先】

〒101-0061

東京都千代田区三崎町 2-14-6 TM水道橋ビル 4階

バードライフ・インターナショナル東京²

担当：澤祐介

電話／FAX：03-5213-0461／0462

メール：yusuke.sawa@birdlife.org

1 バードライフ・インターナショナルは1922年に英国で発足した、世界でも最も古い歴史を持つ国際環境NGOです。120カ国に280万人のネットワークを擁し、名誉総裁には高円宮妃殿下にご就任いただいています。

2 バードライフ・インターナショナル東京は、バードライフ・インターナショナルの日本における活動拠点として、2002年に開設されました。鳥を指標とした重要な生息環境の保全や、森林保全を通じた生物多様性の保全、生物多様性保全のためのさまざまな活動を推進しています。日本では（財）日本野鳥の会をパートナーに協働事業を展開しています。

日本で減少が著しいカシラダカ

この 30 年間に 75–89%もの個体数が減少しました



カシラダカ (© Aaron Maizlish)

カシラダカ *Emberiza_rustica* は、スカンジナビア半島からカムチャツカ半島にかけて、ユーラシア大陸で広く繁殖し、主に日本、中国、韓国などの東アジアで越冬します。日本でも河川敷や沼沢地のヨシ原などで普通に見られる冬鳥です。

しかし、2016年4月に発表された最新の論文¹によると、過去30年の間に、全世界で75–87%、過去10年間で32–91%もの個体数が減少していることが明らかになりました。減少の原因は、越冬地における農地拡大などによる生息域減少や密猟、繁殖地における森林伐採や火災などによる生息地の破壊などが考えられています。しかし現在のところ、決定的な要因は解明されておらず、更なる調査と緊急の保全対策が急務となっています。

¹ Edenius, L., Choi, C. Y., Heim, W., Jaakkonen, T., De Jong, A., Ozaki, K., & Roberge, J. M. 2016. The next common and widespread bunting to go? Global population decline in the Rustic Bunting *Emberiza rustica*. Bird Conservation International, 1-10.

懸念されるインドネシアの鳥類売買

19種が格上げされ、そのうち6種は絶滅危惧IA類に指定されました



インドネシア・ジャワの鳥市場 (©Peter Nijenhuis, Flickr)

美しい鳴き声の鳥たちはインドネシアの文化に深く根付いており、とくにスマトラ島・ジャワ島・ボルネオ島の3島では、レストランや商店、家庭などいたるところで鳥かごを見かけます。こうした需要を満たすため、多くの鳥が持続可能でない速度で捕獲されています。

インドネシアにおいて、持続可能でない商取引がカンムリシロムクのように分布域が非常に小さい鳥類にとって脅威となっていることは、以前より知られていました。しかし近年になって、こうした取引により、分布域が広い一般的な種にまで影響が及んでいることが明らかになってきました。森林破壊も追い打ちをかけ、かつては数多く生息していた種でも地域絶滅が起り、亜種の中には絶滅したものもいます（スンバゼイガイインコの1亜種、アカハラシキチョウの3亜種、キュウカンチョウの1亜種など）。今すぐ対策を講じ、こうした現状への認識が社会に広まらない限り、亜種だけでなく種全体が同じ道をたどることになると懸念されています。



スンバゼイガイインコ (©Iggino Van Bael)

表1 インドネシアでの鳥の商取引によりレッドリストで格上げになった19種

| カテゴリ | ランクアップした種 |
|-------------------|--|
| 絶滅危惧 IA 類 (6種) | チャビタイガビチョウ、ムクドリ科 <i>Gracupica</i> 属の1種 (<i>Gracupica jalla</i>)、ハッカチョウ属の3種 (<i>Acridotheres melanopterus</i> 、 <i>A. tricolor</i> 、 <i>A. tertius</i>)、キュウカンチョウ属の1種 (<i>Gracula robusta</i>) |
| 絶滅危惧 IB 類 (4種) | キガシラヒヨドリ、スマトラガビチョウ、ソウシチョウ属の1種 (<i>Leiothrix laurinae</i>)、キュウカンチョウ属の1種 (<i>Gracula venerata</i>) |
| 絶滅危惧 II 類 (7種) | スンバゼイガイインコ、ノドアカヒヨドリ、シロガシラ属の1種 (<i>Pycnonotus snouckaerti</i>)、ジャワメジロ、ジャワハッカ、コノハドリ属の1種 (<i>Chloropsis media</i>)、オオコノハドリ |
| 準絶滅危惧種 (2種) | アカボシヒヨドリ、アオバネコノハドリ |

※ すでに絶滅危惧種に指定されており、インドネシアでの商取引の影響を受けている種には、タンビヘキササン (IA 類)、コバタン (IA 類)、カンムリシロムク (IA 類)、ブンチョウ (II 類) なども含まれます。